



## キリストのために生き抜く

「主よ、この罪を彼らに負わせないください」と大声で叫んだ。ステファノはこう言って、眠りについた。

(使徒言行録 7 章 60 節)

ステファノは信仰のために殺されたことで、キリスト教会最初の殉教者となった人です。

殉教という言葉は信仰の証しのような意味で使われることがあります。殉教者というのは、不信仰な人間にとっては爪の垢でもせんじて飲まなければならないような人ですから、大いにたたえられるわけですね。教会はどの教派であっても、殉教者を覚えて、記念しているわけですが、その時、彼らに先立ってイエス・キリストが十字架におかかりになったことが確認されています。キリストこそすべての殉教者が模範としたお方です。

キリスト者はキリストから頂く恵みにあずかるだけでなく、キリストと苦難をも共にしなければなりません。「使徒たちは、イエスの名のために辱めを受けるほどの者にされたことを喜び」(使徒 5:41)と書いてあります。すでにイエス様ご自身が追い出され、ののしられ、汚名を着せられていましたが、使徒たちはイエスの名のゆえにこういうことになったことで、自分たちがイエス様と一体化していることを喜びとしたのです。ステファノが無実の罪で殺された時、イエス様と同じく死ぬことになったことを喜んだかどうかわかりませんが、ある意味ではそれは喜びであったと言えます。ステファノの死は教会にとって敗北ではなく、むしろ勝利でありました。

しかしながら私たちは、一足飛びにそこに入る前に、もう一つのことをしっかりと見ておかななくてはなりません。それをしないで、ただ殉教者をたたえてばかりなのは危険です。いま世界には、自爆テロを起こしながらそれを殉教だと見なしている極端な人もいます。私たちがそうした考え方に引きずりこまれてはなりません。

創世記 22 章にアブラハムがイサクをささげ

2017 年 5 月発行

る話があります。神はアブラハムの信仰を試そうとして、山に登って、愛する息子イサクを焼き尽くす献げ物としてささげるよう命じられます。アブラハムにとって、当然ながらこれほどつらいことはありませんでした。アブラハムが刃物を取り、まさにイサクを殺そうとしたその時、天からみ使いが現れてイサクの命を救ったのです。神はイサクのかわりに、献げものとなる羊を備えて下さいました。

私たちはふつう、献げ物の価値が高ければ高いほど神はお喜びになると考えます。とすると神は、アブラハムの最高の献げ物を喜んで受け取って下さるはずではないでしょうか。まるで人身御供ですね。ところがアブラハムの場合そうはならなかったというところに注目して下さい。

神はアブラハムがささげようとしたものを受け取られませんでした。ならばどうしたか。神おん自ら犠牲の羊を備えて下さったのです。

やがてこの出来事は、イエス・キリストの十字架を指し示していることが理解されるようになりました。それはこういうことです。アブラハムとちがって本当に息子をささげた方がおられた、それが他ならぬ父なる神であられたのです。アブラハムの苦しみは人間をして、愛する御子イエス様を十字架上にささげた父なる神の苦しみを想起させたのです。

また、人の命を神にささげるということにおいて、この出来事は人間ではなく神に主導権があることを示しているのです。

私たちはこのような方向から考えて行きましょう。日本の教会はかつての戦争中、大君(おおきみ)のために死ぬことを殉教と見なす誤りに陥ってしまいました。殉教を美化すると、このように自分や他の人の命をいたずらに失わせる結果を生むことさえあるのです。

キリストのために死ぬことが必要な場合は確かにあります。しかしキリストのために生き抜くことが必要な場合があり、こちらの方がはるかに多いということをまず知って頂きたいと思います。

(2016 年 3 月 5 日の礼拝説教より)

牧師 井上 豊